

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	詠雪唱和に見る慶暦以降の梅堯臣詩
Author(s)	大井, さき
Citation	中國中世文學研究 , 74 : 21 - 37
Issue Date	2021-03-29
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051122
Right	
Relation	



詠雪唱和に見る慶曆以降の梅堯臣詩

大井 さき

はじめに

慶曆年間（一〇四一〜一〇四八）後半、梅堯臣（一〇二〜一〇六〇）は従来詠じられることのなかった日常の細部を盛んに詩に取り入れていく。このことは、花鳥風月など伝統的な主題にあまり重点を置かなくなるといふ傾向を生み出した。唐までに形成された詩の定型から外れていこうするこの時期の試みは、梅堯臣詩の特徴を形作り、ひいては宋代の新しい詩風を切り開くことに關与したと予想できるところが、慶曆年間を過ぎた頃より、伝統的な主題を回避しようという意識が少なくとも梅堯臣の詩作からはあまり感じられなくなる。詩体の傾向も変わる。慶曆後期には五言古詩が詩作の中心だったのが、律詩や七言の詩が多くを占め始める。表面的には慶曆後期の試みに対する「揺り戻し」とも言うべき現象を観察できる。本稿では「揺り戻し」の実態に迫るために、慶曆以降の、古来頻繁に詠じられてきた事物を詠じる作に注目してみたい。分析の対象は「雪」に絞ることにする。「雪」は、多様な種類がある「花」「鳥」

に比べて分析しやすく、「月」よりも残された作品数が多い。さらに、晩年に歐陽脩と共有した「白戦体」と呼ばれる試みでも知られる主題であり、晩年の創作を考察する上でも注目に値するだろう。慶曆以降の詠雪詩を手がかりに、伝統に回帰した点と慶曆後期の試みを継承した点、及び回帰と継承との背景について考察する。

一 主題に見える変化

慶曆後期前後の詩を見渡した限りでは、主題に上述のような変化が起きていると言えそうである。ただ、伝統的に詠じられてきた事物とそうでない事物とを判別するのは難しい。ここでは、少なくとも雪という主題についてはどのような状況になっているのか、梅堯臣詩におけるの雪の取り上げられ方を編年順に確認しておく。まず、慶曆年間までの状況である¹⁾。

天聖九年（一〇三一）「舟中遇雪」（五律）「塗中遇雪寄希深」（五律）

景祐三年（一〇三六）「雪詠」（五律）

宝元元年（一〇三八）「縣齋對雪」（五古八句）「九月都下對雪寄永叔師魯」（五古十二句）「臘日雪」（五律）
宝元二年（一〇三九）「襄城對雪」其一、其二（五古八句）
慶曆元年（一〇四一）「依韻和師直仲春雪中馬上」（五律）
「和師直早春雪後五壇道中作」（五古十二句）
慶曆二年（一〇四二）「春日舟中對雪寄刁經臣」（五律）「依韻和達觀禪師春日雪中見寄」（五律）

慶曆五年（一〇四五）「暮雪」（五古十二句）「西湖對雪」（五律）「依韻和資政侍郎雪後書事」（七絶）「依韻和資政侍郎雪後登看山亭」（七絶）「雪中通判家飲迴」（七古十二句）「雪後資政侍郎西湖宴集偶書」（五律）

慶曆六年（一〇四六）「和道損喜雪」（五排十六句）

慶曆八年（一〇四八）「對殘雪懷歐陽永叔」（五古八句）「遲雪」（五律）「欲雪復晴」（五律）「和人雪意」（五古二十句）「和欲雪二首」其一、其二（五律）「和十二月十七日雪」（七律）

慶曆後期（慶曆四〜八年）にも一見雪が盛んに詠じられているようだが、よく見ると詩作環境に偏りがある。慶曆五年の作は「資政侍郎」すなわち許州知事の王举正、「通判」氏名不詳だが州の副長官との唱和に見える。許州赴任直後にはまだ韓維ら年少の友人たちとの交流は始まっておらず、「暮雪」「西湖對雪」も環境を共有する相手がいたとすれば二名のうちどちらかだろう。慶曆八年の後半四首、「和人雪意」「和欲雪二首」「和十二月十七

日雪」は唱和した相手が明示されていないが、時期的にも前後の詩から考えても、相手は陳州知事の晏殊であろう。「遲雪」「欲雪復晴」二首も前後の詩から陳州での作と推測できるので、晏殊を意識した可能性がある。大半が上官との間での作なのである。この頃盛んに交流した若者たちとの唱和は、その中で最年長の王冲との作が例外的に残るのみで、ほか一首も残されていない。この時期の主要な部分を占める詩作において、雪は詠物の主体的に選択される対象と見なされなかったのである。続く皇祐年間から没年までは様相が異なる。

皇祐元年（一〇四九）「春雪」（五古二十二句）「和謝公儀學士正月十七日雨後復雪」（七律）

皇祐二年（一〇五〇）「潘樂二君對雪寄聲似欲予賦適方知之走筆奉呈」（五律）「雪中懷廣教真人」（五古八句）

皇祐三年（一〇五一）「和江鄰幾詠雪二十韻」（五排四十句）「次韻和韓持國京師雪」（五排三十六句）

皇祐四年（一〇五二）「上元夜雪有感」（五古八句）「上元雪」（五古六句）「十二月十三日喜雪」（七古十句）「除夜雪」（五律）

皇祐五年（一〇五三）「二月四日雪」（七古十四句雜言）「十五日雪三首」其一、其二、其三（五律）

至和元年（一〇五四）「嘉雪應祈呈權郡通判」（七絶）「雪」（五律）

嘉祐元年（一〇五六）「依韻和許待制春雪」（五律）

嘉祐二年（一〇五七）「二月五日雪」（五律）「依韻和吳長

文舍人對雪懷永叔內翰」（七律）

嘉祐三年（一〇五八）「元日閣門拜表遇雪呈永叔」（七律）

「依韻和王景彝對雪」（七律）「次韻和王景彝十四日冒雪晚歸」（七律）「次韻和酬刁景純春雪戲意」（七律）「次韻和酬楊樂道待制詠雪」（五排十六句）「次韻和范景仁舍人對雪」（五排二十句）

嘉祐四年（一〇五九）「次韻和景仁對雪」（五排二十句）「次

韻三和景仁對雪」（五排二十句）「二十五日雪」（五古八句）「次

韻和永叔對雪十韻」（五排二十句）

嘉祐五年（一〇六〇）「次韻劉原甫社後對雪」（五排二十句）

「次韻永叔二月雪」（七古十句雜言）

詩型が豊富になり、特に長篇の排律が繰り返し作られる。大半が唱和詩で、主題の選択は相手による場合が多いが、王季正や晏殊との唱和のような上官との付き合いのため詠雪とは質が異なるようである。例えば皇祐三年の作に名が見える韓持國（韓維）は、許州にて盛んに応酬した若者の一人で、彼らとの気の置けない関係性は慶曆後期の作の中によく表れている²⁰。一時期に唱和を繰り返していることから、梅堯臣と韓維との間に一定の詩作に関する共通認識があり、梅堯臣自身が積極的に雪を詠じていったと見て良いだろう。

慶曆後期には、従来の詩にうたわれてこなかった事物を頻りに取り上げる反面、詩として陳腐と思われる事物

韓維「奉同鄰幾對」36句、上平齊韻。

梅堯臣「次韻和韓持國京師雪」

劉敞「和鄰幾聖俞持國雪十八韻依次用」²⁴

劉敞「次韻和韓持國雪二十韻」²⁵

江休復（一〇〇五〜一〇六〇、字は鄰幾）は当時四十七歳、梅堯臣は五十歳だったのではほぼ同年代である。慶曆六年、蔡州の監税官だった時に、許昌赴任中の梅堯臣と書簡を交わしたのが最も早い交流の記録である。皇祐年間（一〇四九〜一〇五四）の初め頃より、集賢校理として都に戻っており、皇祐三年以降梅堯臣との往来が密になる。韓維（一〇一七〜一〇九八、字は持国）は三十五歳。慶曆六年より梅堯臣と交流がはじまり、その冬から翌年夏にかけて許昌にて盛んに応酬した。皇祐初めには都に滞在しており、江休復との交流はこの時より始まる。劉敞（二〇一九〜一〇六八、字は原父（原甫））は十三歳、弟の劉放（一〇二三〜一〇八九、字は貢父（貢甫））は二十九歳、共に慶曆六年の進士である。皇祐三年の二月に喪が明け、二人とも都に戻っていた。梅堯臣とは宝元元年（一〇三八）にやり取りがあった形跡があるが、本格的な交流は皇祐三年からである²⁶。劉敞とは梅堯臣の没年まで頻繁な往来が続く。劉放は地方官を歴任したため、応酬がほとんど残らない。韓維と劉氏兄弟はほぼ同年代で、梅江とは約二十〜三十歳の開きがある。皇祐三年の詠雪唱和における江休復の原唱は残らない。

は自分から進んで詠じること避けている。少なくとも雪については、その傾向が確認できる。ところが皇祐年間の頃より、典型的な主題であっても敢えて避けることはしなくなる。慶曆後期より後の時期の詩作について考えていくとき、取り上げられる主題の変化は重要な一つの視座となるだろう。右の一覧のうち、嘉祐四年の「次韻和永叔對雪十韻」は玉、月、梨などの語の使用を禁止した、「白戦体」と呼ばれる手法を試みたものとして知られる。そうした晩年の実践と慶曆後期の試みとを繋ぐ詩作活動として、手始めに皇祐三年の詠雪唱和について検討してみたい。

二 皇祐の詠雪唱和

皇祐三年（一〇五一）、父の服喪を終えた梅堯臣は、五月に都汴京に到着し、冬十一月、江休復や韓維、劉敞、劉放兄弟との間で「雪」を主題とした唱和を行った。

第一次…江休復に対する唱和

江休復「詠雪」（佚）

梅堯臣「和江鄰幾詠雪二十韻」40句、上平虞・模韻。

韓維「奉同鄰幾對」²³36句、上平齊韻。

劉敞「奉同鄰幾詠雪」36句、上平東韻。

劉敞「再和鄰幾」40句、下平尤・侯・幽韻。

第二次…韓維の和詩への次韻

他三名の和詩から考えて全三十六句か四十句、いずれかの五言排律だろう。梅堯臣「和江鄰幾詠雪二十韻」第39句に「黃昏特過我（黃昏 特に我に過る）」とあるので、ある夕方に江休復が梅堯臣を訪ねて、詩作を共にしたようである。過ったのが韓維、劉敞劉放兄弟も含み、皆が梅堯臣宅に集った可能性もあるが、少なくとも江休復の訪問が唱和の発端にあることは確かである。以下、梅堯臣の詩作を中心にみていく。

（1）第一次唱和

まず、江休復の作に対して各々が別の韻で和した「第一次」の作について検討を加える。古来数多くの詩人たちに表現されてきた題材を四十句もの長篇で、言葉を尽くして描き出さなくてはならないというのは、先行作品をもたない事物を詠じるのとは違った意味で、ある程度の難易度があると言える。対句、平仄を整え、江休復の原唱と表現の重複を避ける必要もある。これらの制限の中で、どのように雪を描き出そうとしたのだろうか。以下、意味のまとまりごとに数句ずつ区切りながら検討していく。

「和江鄰幾詠雪二十韻」²⁷

1 十一月將雪 十一月 將に雪ふらんとし
2 寒誰計有無 寒さ 誰か有無を計らんや
3 雲橫凍鵬翼 雲 横たはりて凍鵬の翼のごとく

- 4 霰集泣蛟珠 霰集まりて泣蛟の珠のごとし
 5 萬里風爲使 萬里 風を使ひと爲し
 6 千門玉作樞 千門 玉もて樞を作る
 7 縞衣來自鄭 縞衣 來たるに鄭自りし
 8 濤鷺卷從吳 濤鷺 卷くに吳従りす
 9 積甲聞熊耳 甲を積みて熊耳聞こえ
 10 觀鷺入越都 鷺を觀んとして越都に入る

すでに伝統的な題材であるから、雪が降る様子をこと細かに描写する必要はなく、全てを比喻によつて表現する。「白い」「積もる」など雪と性質を同じくする物を「鄭」「吳」「熊耳（洛陽市宜陽県西の山名）」「越都」といったそれぞれの地方から集め、対句や平仄に配慮しつつ効果的に配置し、万里の彼方まで包み込む雪を描き出す。雪そのものと直接関係のない故事によつて、独自の雪表現を追求したのでらう。例えば第九句は、後漢の初め赤眉（王莽の時、樊崇を首領とした義軍）が光武帝に投降した時に、積み上げられた鎧甲が熊耳山ほどにもなったという「後漢書」劉盆子伝¹¹の逸話を用いるが、李白「送外甥鄭灌從軍三首」其二「破胡必用龍韜策、積甲應將熊耳齊（胡を破るに必ず龍韜の策を用ひよ、甲を積むこと應に熊耳と齊しかるべし）」など戦役に関わる詩に用いられ、「積もる」という一点で雪と結び付けられた例は確認できない。梅堯臣は後にも「次韻三和景仁對雪」（嘉祐四年（一〇五九））「受降鑿甲積、罷獵羽毛鋪（降

を受けて鑿甲積まれ、獵を罷めて羽毛鋪かる）」と、この比喻を使用する。「白戦体」で知られる「次韻和永叔對雪十韻」（嘉祐四年）の「雲衣隨處積、水甲等閒屯（雲衣隨處に積もり、水甲等閒に屯す）」に見える「水甲」は用例未見の語だが、「積甲」の比喻をさらに発展させた形と解釈できるのではないか。典故表現の使用という点では伝統に則しているが、描写対象と原典の内容との間に共通点を見出すときの目の付け方に意外性があり、斬新さが生み出されている。

- 11 庭槐高腫腫 庭槐 高くして腫腫たり
 12 屋蓋素模胡 屋蓋 素くして模胡たり
 13 騁巧能藏醜 巧を騁せて能く醜を藏し
 14 論功解飾枯 功を論じて解く飾を飾る
 15 巢禽皆白鳳 巢くふ禽は皆 白鳳
 16 來獸必驕虞 來たる獸は必ず驕虞
 17 遼俗休誇豕 遼俗 豕を誇るを休め
 18 燕丹久望鳥 燕丹 久しく鳥を望む
 19 袒裘無壯臂 裘を袒ぐも壯なる臂無く
 20 附火念焦顛 火に附けば顛を焦がすを念ふ
 21 歌竹休王滿 竹を歌ひて王滿休み
 22 餐毛活使蘇 毛を餐らひて使蘇活く
 23 亡羊何可問 亡羊 何ぞ問ふべけんや
 24 別鶴不應孤 別鶴 應に孤なるべからず

続いて積雪によつて様々な物が固有の色彩と明確な輪郭とを失うさまを写し取る。第17・18句も白に関する典故である。第15・16句で雪が全ての鳥獸を瑞鳥、神獸である白鳳や騶虞（白地に黒い模様の子虎）に見せかけるとしてその偽装行為を指摘するのに続き、遼東の人はすでに頭の白い豚を自慢するのをやめているし（『後漢書』朱

浮伝¹²）、燕太子丹も頭の白い鴉を長いこと待ち望んだ末に帰還を許されたので（『燕丹子』¹³）、雪が豚や鴉が白くしたところで意味がないという。

第19句以降は雪や寒さに苦しめられる者たちの姿を並べる。第21・22句は雪に関する故事を踏まえる。この詩は大量の典故表現を用いるが、雪と直接関わるのはこの二句しかなく、独自の表現を追求する積極的な姿勢が窺える。上句は『穆天子伝』の、穆王が黄竹の地で雪に遭つて休憩し、凍える民を憐れむ詩を作つたという故事に基づく¹⁴。謝惠連「雪賦」（『文選』卷十三）に「岐昌發詠於來思、姬滿申歌於黃竹。（岐昌は詠を來思、『毛詩』小雅「采芣」「今我來思、雨雪霏霏」に發し、姬滿は歌を黃竹に申ぬ。）と引くため、後の詠雪詩にも度々引かれる。下句は『漢書』蘇武伝、匈奴に幽閉された蘇武が衣の毛と雪を混ぜて食らい、生き長らえた故事を踏まえる¹⁵。

「使蘇」「王滿」とも例を見ない呼称だが、韻字「蘇」を句末に置き、対句を整えるため「使者の蘇武」「穆王の姬滿」とする必要があった。固有名詞である「黄竹」の語も対句のため分解する必要があり、原典の表現から離れ

てしまっている。やや強引な用字だが、典型的な故事だからこそ対句を整え韻字を保持することを優先できたのだらう。ここでは既存の表現を避けるのではなく、伝統を踏まえてこそ可能な表現の限界を攻めたのである。

- 25 靡密同脂網 靡密にして脂網に同じく
 26 繁回似舞姝 繁回して舞姝に似る
 27 漸深由片片 漸く深きも片片に由り
 28 取重本銖銖 取りて重きも銖銖に本づく
 29 日月方收照 日月 方に照を收め
 30 乾坤不辨隅 乾坤 隅を辨かたず
 31 雖輕自相壓 輕しと雖も自ら相ひ壓し
 32 更絜亦終渝 更に絜くも亦た終に渝はる

雪が降る姿を、ひとひらずつの雪片に着目しながら繊細な比喻で表現し、やがて降り積もつた後の光景へと筆を進める。第25句のきめ細かい白い肌は積もつた雪全体を、第26句のまといつくように旋回する舞姫は雪の一片一片を喩える。続く二句も、個々の雪片と一面の積雪との関係を述べる。第31・32句は軽いののに圧迫し、潔白なのに最後には姿を変えてしまふ、と句の上下を逆接の関係で繋ぎ、雪の相い矛盾する性質を指摘する。事物の容易に看取できる外見ではなく、その性質から人のあり方、世のあり方にも通じる何らかの摂理を見出す姿勢は、慶曆後期における梅堯臣詩にしばしば現れる。「雪」を主題と

する一連の作品群にもこの姿勢を見て取る事ができる。

- 33 饑虎僵幽谷 饑虎 幽谷に僵れ
- 34 游龍脱勁鬚 游龍 勁鬚脱く
- 35 佳人調蜜蔗¹³ 佳人 蜜蔗を調へ
- 36 公子擁貂狐 公子 貂狐を擁す
- 37 共是空囊客 共に是れ空囊の客
- 38 曾非暖席儒 曾て暖席の儒たるに非ず
- 39 黃昏特過我 黃昏 特に我に過れば
- 40 興與瀟陵俱 興 瀟陵と俱にす

結びの八句では特殊な典故表現を用いる。近い時代の作品、逸話の利用である。第33・34句、龍の鬚が抜けるというのが唐突だが、韓愈「苦寒」¹⁴「虎豹僵穴中、蛟螭死幽潛。熒惑喪躑次、六龍冰脱髯(虎豹 穴中に僵れ、蛟螭幽潛に死す。熒惑 躑次を喪ひ、六龍 脱髯氷る)」から二句を拾い、厳しい寒さを表現したと思われる。第40句「興與瀟陵俱」は唐末・鄭絜(？)八九九)の逸話で¹⁵、先行する使用例は未見。こちらにも斬新な選択と言える。梅堯臣自身には早いものから「雪」(皇祐六年(一〇五四))「誰憶新豐酒、乘驢瀟水東(誰か憶はん 新豐の酒を、驢に乗らん 瀟水の東に)」、「送永興書寄王申」(嘉祐二年(一〇五七))「瀟陵十二月、風雪將漫漫。誰方策騫驢、舊道涉古岸。是時吟興愜、不問前亭爨(瀟陵 十二月、風雪 將に漫漫たらんとす。誰か方に騫驢に策うち、舊道

古岸を渉る。是の時吟興愜ければ、前亭の爨ぐを問はず)」、「と、少し後の世代では宋・強至(一〇二二)一〇七六)「九月二十六日河上雪」(『祠部集』卷八)に「亦欲蹇驢乘逸興、瀟橋何處覓詩翁(亦た蹇驢もて逸興に乗ぜんと欲するも、瀟橋 何れの處にか詩翁を覓めん)」との用例があり、梅堯臣によって新たな典故が生み出されたとも言える。

「雪」という伝統的な主題を扱うとき、従来なかった新たな表現を求めようとして、ここまでに見たように梅堯臣は典故表現を多用した。ただし、必ずしも「雪」と結びつけられることのなかった典故をやや視点を变えて「雪」と結びつけた場合と、全く新しい典故を開拓した場合とがある。

(2) 第二次唱和

二回目の唱和ではさらに制約を厳しくする。次韻である。また、詩題に「京師」が加わっており、韓維の詩の内容を踏まえた上で更に場面を都に限定する。詩作の状況をもう一度整理すると、押韻は上平十二齊韻で、三十六句一韻到底、原唱が韓維「奉同鄰幾對」で、梅堯臣と劉敞、劉敞の三人が次韻する。劉敞の詩題に江休復、梅堯臣の名があるが、これが梅堯臣の一回目の唱和を言うか二回目の唱和を言うかは分からない。次韻する文字の処理が梅堯臣、劉敞、劉敞の順に複雑さを増すことから、創作の順序もこの通りなのではないかと推測できる。例

えば第8句、韓維「佳氣動烝黎」梅堯臣「資農必慰黎」がいずれも民衆の意味なのに対し、劉敞「壤色變玄黎」は黒色の意味で、劉敞「天通憶命黎」は『尚書』呂刑「乃命重黎、絶地天通、罔有降格。(乃ち重・黎に命じて、地天の通を絶ち、降格すること有る罔からしむ。)」を踏まえ、人名として用いる。第10句「圭」も、韓維、梅堯臣、劉敞が玉器の圭として用いるのに対し、劉敞は「刀圭」として、薬を盛る匙の意味に用いる。先行する作との重複を避けるため、後になるほど無理をしなければならなくなつたように見える。年齢的にも、また当時の次韻唱和において梅堯臣が主体的な役割を担うようになっていくことから考えても¹⁶、梅堯臣が率先して次韻を始めたと考えるのが自然であろう。特定はできないが、ひとまず韓維一人の詩を踏まえて創作したものと考えておく。

梅堯臣の韻字の使い方にはあまり無理が感じられないが、できるだけ原唱との重複を避けた方が良かっただろう。同じ文字であっても原唱から大きく意味を変えている所に、やはり斬新な表現がある。その中には、一作目よりも特殊な、ある意味奇怪とも言えるような表現も見られる。

「次韻和韓持國京師雪」¹⁷

- 1 寒威無遠近 寒威 遠近無く
- 2 素色混高低 素色 高低を混じふ
- 3 玉路平何廣¹⁸ 玉路 平らかにして何ぞ廣き

- 4 天形浩莫倪 天形 浩くして倪莫し
- 5 壓階寧辨玉 階を壓して寧ぞ玉を辨かたんや
- 6 封谷不須泥 谷を封ざすに泥を須ひず
- 7 殄厲非乖候 厲を殄くして候に乖くに非ず
- 8 資農必慰黎 農を資けて必ず黎を慰む

第6句は韻字の「泥」について韓維「清衢凍不泥(清衢凍りて泥あらず)」との重複を避けるため、「封泥」(書簡の結び目に封をする泥)を発想したのでだろう。封泥を守りの堅さの比喻に用いた『後漢書』隗囂伝に見える「(王元曰)元請以一丸泥爲大王東封函谷關。此萬世一時也。(王元曰)元請ふ 一丸の泥を以て大王の爲に東のかた函谷關を封せんことを。此れ萬世の一時なり。)」という故事を用いて、谷を封鎖してしまう雪を描き出した。封泥のように守りの堅い雪という、韻字の固定がなければ逆に思いつかないような比喻を生み出している。やや強引な関連づけではあるが、次韻という縛りが新たな典故表現開拓の可能性を高めているのが確認できる。

- 9 大輪中府帛 大いに中府の帛を輪り
- 10 雜有上公圭 雜ふるに上公の圭有り
- 11 星弁交光衆 星弁 光を交へて衆くし
- 12 珠旒動影迷 珠旒 影を動かして迷はす
- 13 凌波妃度洛 波を凌ぎて妃 洛を度り
- 14 銷鼎烹齊 鼎に銷えて士 齊に烹らる

- 15 工鏤蹲奇獸¹⁹ 工みに鏤りて奇獸を蹲らせ
 16 鮮粧印女奚 鮮かに粧ひて女奚に印す
 17 簾開白羽扇 簾は開く白羽の扇
 18 橋跨半輪霓 橋は跨ぐ半輪の霓

韓維が宮廷の様子をうたった句13・16「賀瑞彤墀集、凌寒玉仗齊。御筵開省戶、賜醴走宮奚（瑞を賀して彤墀に集ひ、寒を凌ぎて玉仗齊ふ。御筵省戸を開き、賜醴宮奚走る）」を承けて、梅堯臣は宮中の事物全てを雪との共通点や雪による比喻を用いて表現する。13・14「凌波妃度洛、銷鼎土烹齊」は、韻字「齊」の用い方を韓維とは変えようとしたのだろう、地名の意味を選択し、第13句には配するに知名であることが分かりやすい「洛」を用いた。齊の地に関わる雪として典故表現を発想するのは自然だが、湯に落ちて消えていく雪を煮殺される人物に喩えるという発想は独創的である。「齊」に対して「洛」を配したため、第13句の「洛」にまつわる典故を「雪」と結び付けることが必要となるが、曹植「洛神賦」には原文に雪に関する表現があるので、恐らくはこちらから発想し、水に関わる共通点から第14句の描写に至ったのだろう²⁰。韓維の句頭「凌寒」も発想を助けたのかもしいれない。同じ字を用いた「凌波」の語は「洛神賦」の表現（原文は「陵波」）をほぼ直接引くからである。洛水を渡る女神を雪に喩える原典の表現を逆転させ、洛水の上を舞い飛び雪を女神に喩えた。韻字、対句、さらに原唱

の表現といった様々な条件の下、水面上の雪と『史記』に描かれた酈食其の最期との共通点を見出したのである²¹。

19 走吠生鼈犬 走り吠ゆ 鼈を生ぜし犬
 20 姦埋縮殼蠮 姦は埋む 殼に縮まりし 蠮
 21 力狂墀下馬 力狂なり 墀下の馬
 22 聲嚙樹頭雞 聲嚙む 樹頭の雞
 23 團綴花爭發 團まり綴りて花 争ひて發き
 24 燂庖矜已割 燂て庖きて 矜 已に割かる

第19・20句の典故表現も特殊である。「蠮」は十八の韻字の中で特に用例の少ない文字である。亀に関する韓愈の詩句「烏龜怯姦怕寒、縮頸以殼自遮（烏龜姦に怯え寒を恐れ、頸を縮めて殼を以て自ら遮る）」（「月蝕詩效玉川子作」）を援用したのは、韓維詩の19・20「山號悲虎兕、淵伏怯龜蠮」が韓愈の同詩及び「詠雪贈張籍」「龍魚冷蟄苦、虎豹餓號哀（龍魚冷たくして蟄るるに苦しみ、虎豹餓えて號くこと哀し）」に類似するので、それを承けたのかもしれない。或いは自身が前作33・34「饑虎僵幽谷、游龍脫勁鬚」で韓愈の「苦寒」詩を引いたことから発想だろうか。月を食う蝦蟇の凶行に怯える玄武のように、雪の猛威に怯えて縮こまった大亀は、凶悪なほどに降り積もる雪に埋められてしまう。

対句には柳宗元「答韋中立論師道書」「前六七年、僕來

南。二年冬、幸大雪、踰嶺被南越中數州。數州之犬、皆蒼黃吠噬、狂走者累日、至無雪乃已。（前六七年、僕南に來る。二年の冬、幸ひに大いに雪ふり、嶺を踰えて南越中の數州を被ふ。數州の犬、皆蒼黃として吠噬し、狂走する者累日、雪無きに至りて乃ち已む。）嶺南の地の犬が雪に驚き、吠えて駆け回るといふ典を用いる。「縮殼」に対応する「生鼈」とは、『後漢書』岑彭伝にその善政を贊美する民衆の歌として「狗吠不驚、足下生鼈。（狗吠ゆるも驚かず、足下に鼈を生ず。）」とあるのを踏まえる。李賢注は「鼈、長毛也。犬無追吠、故足下生鼈。（鼈、長毛なり。犬追いて吠ゆる無く、故に足下に鼈を生ず。）」とする。平素は大人しい長毛の犬すらも、雪に驚き吠えて走り回るといふ。韓維は二句ともが厳しい寒さに苦しむ生き物たちをうたうものだったが、梅堯臣はより関連性の薄い二つの状況を描き出す。韓愈の詩に対して柳宗元という、同時代の、共に古文家として知られる人物の、しかも雪に関わる文を配し、より整った対句を作って技量を見せつけたのである。唱和を繰り返す中で、表現が練り込まれていったのが分かる。

先行作品をほとんどもたない事物を詠じる時、典故を用いようとすれば、詩や賦のみならずあらゆる文献から材料を求めることになる。比較的近い時代の作品や、散文や小説のようなジャンルの作品を用いた典故表現は、慶曆後期の詩作と同じ方向性をもつ。

- 25 獵人初逐跡 獵人 初めて跡を逐ひ
 26 饑鳥未辭棲 饑鳥 未だ棲を辭せず
 27 凍酒誰能貴 凍酒 誰か能く貴らん
 28 危樓不厭躋 危樓 躋るを厭はず
 29 狐冰疑在耳 狐冰 耳に在るかか疑ひ
 30 狸玉刻成蹄 狸玉 刻みて蹄を成す
 31 可席纖腰舞 可 席とすべくして纖腰舞ひ
 32 盈盤素手攜 盤を盈たして素手攜ふ
 33 休傳上林雁 傳ふるを休めよ 上林の雁
 34 曾繫子卿題 曾て繫ぐ 子卿の題するを
 35 願逐周王駿 願はくは周王の駿を逐はんことを
 36 瑤池勝越溪 瑤池 越溪に勝らん

第29句以降は第28句「危樓」からの眺めを描く。「狐冰」は川の上に積もる雪、「狸玉」は木の上に積もる雪をそれぞれ表現する。前者は狐が氷を渡る時に下に流水の音があるか聞いて判断するという習性に基づく²²。「狸玉」は、中国南方に棲息する「玉面狸」という顔の白い狸で雪を喩えたものだろう。「牛尾狸」ともいい、明・李時珍『本草綱目』獸二・狸に「南方有白面而尾似牛者、爲牛尾狸、亦曰玉面狸。專上樹木食百果。冬月極肥、人多糟爲珍品、大能醒酒。（南方に白面にして尾の牛に似たる者有り、牛尾狸と爲し、亦た玉面狸と曰ふ。専ら樹木に上りて百果を食らふ。冬月 極めて肥え、人多く糟して珍品と爲し、大いに能く酒を醒ます。）」とあるように、

木の上で生活する。木の上の狸が滑らないよう鳥の蹴爪のような足でしがみついているかのようだと、枝に積もった雪を比喩するのである。唐・段成式『酉陽雜俎』続集卷八・支動に「洪州有牛尾狸、肉甚美。（洪州〔江西省南昌市〕に牛尾狸有り、肉甚だ美し。）」と見られるが、詩賦に先例は確認できない。この詩以降では、梅堯臣自身が四年後の至和二年（一〇五五）「宣州雜詩二十首」其十六に「沙水馬蹄鼈、雪天牛尾狸（沙水に馬蹄鼈あり、雪天に牛尾狸あり）」と、故郷宣城（安徽省宣城市）の冬の珍珠としてうたう。狐と釣り合いが取れ、雪を喩えられるものを探して、書物というよりも自身の知識の中から引つ張り出してきたのではないかと思われる。劉敞「送南昌郭主簿」（『公是集』卷十九）にも「狸品牛尾貴、茶牙鷹瓜長（狸の品は牛尾貴く、茶の牙は鷹瓜長たり）」と見えるので、前後関係は不明ながら共有されていた知識なのではないかと想像できるが、それにしても詩に初めて持ち込む物によって比喩を行うというのは、前作よりも更に思い切った表現である。受け手の意表を突くような技巧と斬新さを狙ったのだろう。

- これ以降は韓維の次のような結びに対する応答である。
- 31 吾交情不薄 吾が交情 薄からず
 - 32 今日手同攜 今日 手同に攜ふ
 - 33 酒撥新醕酌 酒は新醕を撥して酌み
 - 34 詩看本字題 詩は本字を見て題す
 - 35 優游無不可 優游して可ならざる無くんば

三 慶曆後期との比較

以上で見てきた詩の作り方、楽しみ方は、慶曆後期の詩作と比べたときどのような関係にあるのだろうか。どの点に変化し、どの点が継承されているのかを考えてみたい。

「和道損喜雪」（慶曆六年）^[26]

- 1 密雪已迎臘 密雪 已に臘を迎へ
- 2 隨風來拂巾 風に隨ひ來たりて巾を拂ふ
- 3 偏知寒夜屋 偏へに寒夜の屋を知りて
- 4 不管醉歸人 醉歸の人を管けず
- 5 暗積空庭合 暗かに積もりて空庭に合ひ
- 6 偷裝衆樹新 偷かに装ひて衆樹新たなり
- 7 沃田將望歲 田に沃げば將に歳を望まんとし
- 8 壓瘡且忘貧 瘡を壓すれば且く貧を忘る
- 9 薄厚曾無意 薄厚 曾て意無きも
- 10 飄揚似有因 飄揚 因有るに似る
- 11 既能先覆物 既に能く先んじて物を覆へば
- 12 乃見未饒春 乃ち見る 未だ春に饒らざるを
- 13 作陣從天落 陣を作りて天從り落つるも
- 14 何功得地均 何の功ありてか地の均しきを得ん
- 15 暫欣供一賞 暫く一賞に供するを欣ばん
- 16 惜逐馬蹄塵 惜しむらくは馬蹄の塵を逐はんことを

36 何必剡中溪 何ぞ必ずしも剡の中溪にあらん
結びは『世說新語』任誕に見える、友を訪ねて剡溪行き、会わずに帰る王子猷の故事を用いる^[27]。我々の集いはすばらしいものだから、どうか途中で帰ったりせずに、会いに来てくださいと江休復を誘うのである。王子猷の故事は月並みとも言えるだろう。これに対して梅堯臣は、蘇武のように手紙に託すのはやめて、できることなら西王母との宴会のように皆で集まりたいのだがなあ、と渋ってみせる。蘇武と周穆王の典故を用いるが^[28]、前掲の作に見たとおり、雪と直接繋がるのは蘇武「餐氈」の故事、穆王「黄竹」の故事であり、ここに引く蘇武が雁に託した手紙、穆王の漫遊や瑤池での西王母訪問は、雪とは関係がない。自身の前作を経由することで、間接的に雪という主題に繋げている。「越溪」は西施が薄絹を洗濯した川の名としても知られるが、ここは韓維の結びの句を承けて、剡溪を指す。山陰は越なので、言い換えたのである。これも一首目の唱和で見たのと同様、典型的だからこそ可能な、原典の突き放し方だと言える。

文献によって広く知られている訳ではない知識を基にして比喩表現を生み出す、自身の作を媒介にして主題と典故を結び付けるなど、前作よりも一層「雪」という主題からの飛躍が大きくなったようである。次韻という縛りが通常とは異なる発想を促す。制限の中からひねり出される、時に自らの想定をも外れた表現を皆で楽しむのである。

慶曆後期に韓維らと共に盛んに交流した人物の一人、王冲（生没年不詳）と唱和したものである。比較的長篇の五言排律である。五言排律の唱和という点で右に検討した皇祐年間の作と同じだが、詩の作り方は大きく異なる。この詩で典故らしき表現といえば、第4句の「醉歸人」くらいである。前節で挙げた王子猷の故事が意識されており、その人物のかぶる「巾」には陶淵明のような隱士のイメージがあるだろう^[29]。とはいえ、漠然としたイメージが連想できる程度で、あからさまに典故を踏まえた言葉は用いない。

本作には虚詞の使用が目立つ。3・4「偏知」「不管」は「ただ」知るだけで、……は気にしない」、11・12「既能」「乃見」は「〜できるので、そこで……が分かる」のように、虚詞を呼応させて関係性が補足されており、散文的である。7・8「將」は夜が明けた後の状況を、「且」は仮初めに短期間だけ存在する状態であることを表現し、句の中で効果的に用いられる。また、動詞+目的語の形を取るなどして、一字一語の構造が多用される。十六句中、五字が全て語として独立しているのは三聯ある。7・8「沃田」は、肥沃な田畑という意味で名詞的に多く用いられるが、ここでは対句から考えて「沃」は動詞である。11・12「既能先覆物、乃見未饒春」虚詞が重ねられ、「覆物」「饒春」も頻繁に組み合わせられる語ではなく、関係性が掴みづらい。13・14「得地均」も同様の読みづらさがある。皇祐の一首目において一句すべてが一音節語

だけで構成された句は、三十六句中で13・14「聘巧能藏醜、論功解飾枯」31・32「雖輕自相壓、更絮亦終滄」わずかに二聯で、語と語の関係性に難解な点はない。逆に、皇祐11・12「庭槐／高／靡腫、屋蓋／素／模胡」や33・34「饑虎／僵／幽谷、游龍／脱／勁鬚」、35・36「佳人／調／密蔗、公子／擁／貂狐」のように一句中に二音節語がふたつ重ねて用いられる句は、慶暦の排律の方には見えない。総じて、語のレベルにおいて散文の表現に寄っていかうとする姿勢が確認できる。

「揺り戻し」は主題及び詩体の選択とともに、主題の描き出し方にも現れている。律詩の技巧を避けることから、積極的利用する方向へと、梅堯臣の姿勢が変化したのが分かる。

ただし、「揺り戻し」の時期、中国古典詩の伝統から強いて離れようとする姿勢があまり顕著でなくなつたことは、梅堯臣詩の本質が変わつたことを意味しない。慶暦後期にありふれた主題を避け、或いは典故や対句の使用を避けて、散文などの要素を持ち込んだのは、陳腐な表現を嫌つたためである。皇祐年間に伝統的な方法を用いて行おうとしたことも、やはり斬新な表現の追求である。そのため両時期の詩は、表現方法としては異なるものの、よく見ると「雪」との向き合い方は共通する。「和道損喜雪」9・10「薄厚曾無意、飄揚似有因」は、平等に降り積もるさまと、ふいに舞い上がる動き、二つの雪の状態から「無意」「有因」という対応を見出して対句にする。

元年（一〇五六）など、慶暦後期に盛んにうたわれたような日常生活の細部を取り上げる詩は作られ続けていく。それに併せて、伝統的な主題や方法も新しい表現を追求できる手段として盛んに利用し、更に表現の幅を広げていったのだと思われる。

おわりに

慶暦後期に主体的に詠じようとはしなかつた「雪」などの伝統的な主題を、梅堯臣は慶暦を過ぎた頃より、唱和の作に限らず繰り返し詩作の対象とするようになる。慶暦後期の詩作が伝統の枠から専ら逸脱しようとしていたのと、表面的には異なるように見える。しかし、皇祐年間の詩作は、ただ単純に伝統に回帰しようとしていたわけではない。古来うたい継がれてきた主題に対して、律詩の表現技法を活用しながら、新たな表現を追求するものであつた。梅堯臣は、主題となる事物に従来は直接結び付けられることのなかつた典故を、視点を変えることによつて敢えて結びつきを作り出した。また、彼にとつて近い時代であつた唐代の文献や自身の見聞から清新な詩的言語を生み出した。それらの中には、いわば次の時代の新しい典故となつていったものもあつただろう。慶暦後期の詩作も皇祐の詩作も、陳腐を避け、斬新な表現を目指すという根本の姿勢は変わらない。伝統に回帰したように見える詩作も慶暦後期の試みの延長線上にあつて、新しさを求める方法に新たな要素が加わつたので

見た目からすぐに導き出せる対照関係ではなく、雪を擬人化し、その性質を捉え直すといった思考の上でたどり着く表現であるように思う。典故表現という方法は採らないが、「雪」というありふれた主題を人が思いつかないような二つの事柄の組み合わせを作つて表し、陳腐な表現を避けようとしたのである。

第11・12句は雪が春よりも先に万物を覆い尽くしたことで、雪が春に劣らないことがわかるという。「未饒」は李白「上皇西巡南京歌十首」其三に「柳色未饒秦地綠、花光不減上陽紅（柳色未だ秦地の緑に饒らず、花光上陽の紅に減らず）」とあるように前後の物を比較する表現で、雪も春も万物を覆うものであるという共通点によつて両者を対比し、時期が先行する点で雪は春に劣らないという。第13・14句では、群がり落ちてくる雪を軍隊に擬え、両者の「平らかにする」点にも共通性を見出す。この比喻を更に展開して、「しかし雪は何の功績も挙げていない」と少し揶揄しながら、文脈をもう一度屈折させて「暫」「一賞」「ひとまず」「わずかばかりの」と、間もなく汚されてしまうことになる雪に暖かな目を向ける。「平」という積雪の状態からの「平定」や「戦功」への連想は、皇祐の第一作で「積」という雪の性質から「積甲」の典故を導き出したのともよく似て、一つの性質から考察を展開させて、簡単には思いつかないであろう斬新な比喻表現を作り出そうとしている。

皇祐年間に降にも飼ひ猫の死を悼む「祭猫」詩（嘉祐）ある。皇祐以降も、斬新な表現を追求するという根本の姿勢を維持したまま、伝統的な主題を敢えて避けることもなく、律詩の技巧を効果的に用いる、どちらかと言えば「回帰」と見なすことのできる作詩方法と、慶暦後期と同様に従来の詩になかつた主題を取り上げやや散文的な表現に傾く、「逸脱」と呼ぶことのできる詩作方法とが併存する。或いは一篇の中で二つの方法が共に用いられ、双方の要素が融合し互いが互いを際立たせるような例も見られる。梅堯臣という詩人がひとつの詩境に満足し踏み止まるのではなく、様々な試行錯誤を繰り返し、それに楽しみを見出す詩人であることが分かる。梅堯臣は皇祐三年から没年までの約十年間、服喪を除くほぼ全ての期間を都で過ごした。唱和詩が大量に残ることから推測できるように、彼の試行錯誤は周囲の人物たちと共有されただろう。個々の試みの様相と、他の詩人たちとの影響関係について、更に細かに検討していきたい。この作業を積み重ねることが、梅堯臣詩全体を俯瞰する視点を築き上げることに繋がっていくはずである。

注

「1」梅堯臣詩のテキスト及び編年は朱東潤『梅堯臣集編年校注』（上海古籍出版社、二〇〇六年新一版。初版は一九八〇年。以下『編年校注』）に従う。『四部叢刊』所収の明・万曆刊本『宛陵先生集』（以下万曆本『宛陵集』）を併せて確認し

た。

なお、本稿で引用した文献は以下の通り。二十四史は中華書局点校本、十三経は清・阮元校勘『十三経注疏』（中文出版社）、『文選』は胡刻本を用いた。

『燕丹子』（程毅中点校『燕丹子・西京雜記』中華書局、一九八五年）

『穆天子伝』（『四部叢刊』本）

南朝宋・劉義慶『世説新語』（龔斌校釈『世説新語校釈』上海古籍出版社、二〇一九年）

北魏・酈道元『水経注』（『四部叢刊』本）

北齊・顔之推『顔氏家訓』（『四部叢刊』本）

唐・段成式『酉陽雜俎』（『四部叢刊』本）

五代・孫光憲『北夢瑣言』（賈一強点校『北夢瑣言』中華書局、二〇〇二年）

明・李時珍『本草綱目』（『四庫全書』本）

安旗等箋注『李白全集編年箋注』中華書局、二〇一五年。

清・方世举著、郝潤華・丁俊麗整理『韓昌黎詩集編年箋注』中華書局、二〇一二年。

尹占華・韓文奇校注『柳宗元集校注』中華書局、二〇一三年。

宋・韓維『南陽集』（『四庫全書』本）

宋・劉敞『公是集』（『四庫全書』本）

宋・強至『祠部集』（『四庫全書』本）

宋・劉攽『彭城集』（『四庫全書』本）

※本稿で検討した詠雪唱和はそれぞれ『南陽集』卷八、『公是集』卷二十六、『彭城集』卷十六所収。

は即ち頭を白くし、馬は角を生ず。秦王已むを得ずして之を遣るも、機發の橋を爲りて、丹を陥れんと欲す。」とある。

〔11〕『穆天子伝』卷五に「天子乃休。日中大寒、北風雨雪、有凍人。天子作詩三章以哀民。（天子乃ち休む。日中大いに寒く、北風ありて雪雨り、凍ゆる人有り。天子詩三章を作りて以て民を哀れむ。」と。その詩が「我徂黃竹」で始まるため、「黃竹」は詩の篇名ともされる。ちなみに「雪賦」の李善注には「穆天子傳』曰、天子遊黃臺之丘、大寒、北風雨雪。天子作詩三章、以哀人夫。我徂黃竹、員閔寒、乃宿於黃竹。」とある。

〔12〕「單于愈益欲降之、乃幽武置大窖中、絕不飲食。天雨雪、武臥齧雪、與旃毛并咽之。（單于愈いよ益ます之を降さんことを欲し、乃ち武を幽して大窖の中に置き、絶えて飲食せしめず。天雪雨るに、武臥して雪を齧み、旃毛と并せて之を咽む。）とある。

〔13〕『編年校注』作「密」、無校注。今拠万曆本『宛陵集』改。

〔14〕五代・孫光憲『北夢瑣言』卷七に「唐相國鄭縈、雖有詩名、本無廊廟之望。……或曰、『相國近有新詩否。』對曰、『詩思在灞橋風雪中驢子上、此處何以得之。』蓋言平生苦心也。（唐の相國鄭縈、詩名有りと雖も、本より廊廟の望み無し。……或ひと曰く、『相國近ごろ新詩有りや否や』と。對へて曰く、『詩思は灞橋風雪中驢子の上に在り、此の處何を以てか之を得んや』と。蓋し平生の苦心を言ふなり。）とある。

〔15〕「蹇」疑當作「蹇」。校注云「詩見殘宋本、他本皆無。」

〔2〕拙稿「慶曆後期における梅堯臣の詩と詩作の場——韓維との応酬を中心に——」（『日本中国学会報』第七十三集、二〇二一年）に掲載予定）にて考察した。

〔3〕「對」、「對雪」の誤りか。

〔4〕原唱に対し、第五・六韻と第七・八韻の間で順序の転倒がある。

〔5〕実際は原唱と同じ十八韻。

〔6〕宝元元年の梅堯臣の詩題に「劉十秀才」「劉弟」の語が見え、朱東潤が劉敞、劉敞兄弟ではないかと推測する。

〔7〕『編年校注』卷二十一、万曆本『宛陵集』卷十三。

〔8〕樊崇乃將盆子及丞相徐宣以下三十餘人肉袒降。……積兵甲宜陽城西、與熊耳山齊。（樊崇乃ち盆子及び丞相徐宣以下三十餘人を將めて肉袒して降る。……兵甲を宜陽城の西に積むに、熊耳山と齊し。）とある。

〔9〕「往時遼東有豕、生子白頭、異而獻之。行至河東、見羣豕皆白、懷慙而還。（往時遼東に豕有り、子を生みて白頭なれば、異として之を獻せんとす。行きて河東に至り、羣豕の皆白きを見て、慙を懷きて還る。）とある。

〔10〕「燕太子丹質於秦、秦王遇之無禮、不得意、欲求歸。秦王不聽、謬言曰、『令烏白頭、馬生角、乃可許耳。』丹仰天歎、烏即白頭、馬生角。秦王不得已而遣之、爲機發之橋、欲陷丹。（燕の太子丹秦に質せられ、秦王之を遇するに禮無ければ、意を得ずして、歸らんことを欲求す。秦王聽かず、謬言もて曰く、『烏をして頭を白からしめ、馬をして角を生ぜしむれば、乃ち許すべきのみ』と。丹天を仰ぎて歎くに、烏

〔16〕緑川英樹「文字之楽——梅堯臣晩年の唱和活動と『楽』の共同体——」（『中国文学報』第六十五冊、二〇〇二年）を参照。

〔17〕『編年校注』卷二十一。校注云「詩見殘宋本、他本皆無。」

〔18〕校注云「『玉』疑當作『王』。」

〔19〕校注云「『罇』疑當作『罇』。」今拠改。

〔20〕曹植「洛神賦」（『文選』卷十九）に「髣髴兮若輕雲之蔽月、飄颻兮若流風之迴雪。（髣髴たること輕雲の月を蔽ふが若く、飄颻たること流風の雪を迴らすが若し。）」と、また「陵波微步、羅韞生塵。（波を陵ぎて微歩すれば、羅韞塵を生ず。）」とある。

〔21〕『史記』酈生（食其）伝に「齊王田廣聞漢兵至、以爲酈生賣己。……齊王遂亨酈生、引兵東走。（齊王田廣漢の兵至ると聞き、以爲へらく酈生己を賣ると。……齊王遂に酈生を亨、兵を引きて東に走る。）」とある。

〔22〕校注云「『席』疑有誤。」

〔23〕『水経注』河水一に引く郭縁生「述征記」「盟津河津恒濁、方江爲狹、比淮濟爲闊、寒則冰厚數丈。冰始合、車馬不敢過、要須狐行。云此物善聽、冰下無水乃過、人見狐行、方渡。（盟津の河津恒に濁り、江に方べて狭しと爲し、淮濟に比べて闊しと爲し、寒ければ則ち冰厚さ數丈なり。冰始めて合ふに、車馬敢へて過ぎず、要らず狐の行くを須つ。云ふ此の物善く聽き、冰下水無ければ乃ち過ぐと、人狐の行くを見て、方めて渡る。）」、北齊・顔之推『顔氏家訓』書証「狐之爲獸、又多猜疑、故聽河冰無流水聲、然後渡。（狐の獸爲る、又た猜疑すること多く、故に河冰に流水の聲無きを聽き

て、然る後に渡る。」などの記載がある。

[24] 『王子猷居山陰、夜大雪。眠覺、開室、命酌酒、四望皎然。因起彷徨、詠左思『招隱詩』、忽憶戴安道。時戴在剡、即便夜乘小船就之。經宿方至、造門不前而返。人問其故、王曰、『吾本乘興而行、興盡而返、何必見戴。』(王子猷山陰に居るに、夜大いに雪ふる。眠り覺めて、室を開き、命じて酒を酌ましむるに、四望 皎然たり。因りて起ちて彷徨し、左思の『招隱詩』を詠じ、忽ち戴安道を憶ふ。時に戴は剡に在り、即便ち夜 小船に乗りて之に就く。經宿にして方めて至るも、門に造りて前まずして返る。人其の故を問ふに、王曰く、『吾 本 興に乗じて行き、興盡きて返る、何ぞ必ずしも戴を見んや』と。)」とある。

[25] 『漢書』蘇武伝に「(常惠) 教使者謂單于、言天子射上林中、得雁、足有係帛書、言武等在某澤中。(常惠) 使者をして單于に謂はしめて、言ふ 天子 上林中に射て、雁を得るに、足に帛書を係くる有りて、武等 某澤中に在りと言ふと。)」と、『穆天子伝』卷三に「乙丑、天子觴西王母于瑤池之上。(乙丑、天子觴西王母於瑤池之上。(乙丑、天子 西王母に瑤池のほとり 觴す。)」とある。

[26] 『編年校注』卷十六、万曆本『宛陵集』卷二十九。

[27] 『宋書』「隱逸伝」陶潛に「郡將侯潛、值其酒熟、取頭上葛巾漉酒、畢、還復著之。(郡將 潛を 候ふに、其の酒の熟するに値へば、頭上の葛巾を取りて酒を漉し、畢はりて、還た復た之を著く。)」とある。